

2022年10月23日（日）「イエスの焼き印」

ガラテヤ 6:11-18

11 御覧のとおり、私はこんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています。12 肉において見栄を張りたい人たちがあなたがたに割礼を強いています。彼らはただ、キリストの十字架のために迫害を受けたくないだけなのです。13 実際、割礼のある者自身、律法を守っていないのに、あなたがたに割礼を望んでいるのは、あなたがたの肉を誇りたいからです。

14 しかし、この私には、私たちの主イエス・キリストの十字架のほかには、誇るものが決してあってはなりません。この方を通して、世界は私に対し、また私も世界に対して十字架につけられたのです。15 割礼の有無は問題ではなく、大事なものは、新しく造られることです。16 この基準に従って進む人々の上に、また、神のイスラエルの上に、平和と憐れみがありますように。

17 終わりに、誰も私を煩わさないでほしい。私は、この身に、イエスの焼き印を帯びています。18 きょうだいたち、私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にありますように、アーメン。

#### 【序論】

ガラテヤ書の講解も今日で最終回となります。昨年の9月5日に学び始めてから丸一年、回数にして35回となりました。「パウロの味わい」をお伝えしたい、読者の皆様が使徒パウロの息遣いを感じ、彼の性格、思想、熱意が魂に浸透していくこと目指して取り組んでまいりました。振り返りますと、第二回目の説教の中で私はこんなことを語っておりました。「私が目指すところは、本書のメッセージをお伝えしていくことですが、同時にパウロという人物が皆様にとって身近な存在になっていくことでもあります。」

6:10 までは、どうもパウロが弟子に口述筆記をさせていたようなのですが、最後に来て彼自身が筆を取って書き添えているようです。

**御覧のとおり、私はこんなに大きな字で、自分の手であなたがたに書いています。(6:11)**

「大きな字で書く」というのは、それほど彼が伝えたい事柄であるということ。それも、ただ署名をして終わるのではなく、比較的長いメッセージを書き残す形で、これまで本書で語られてきたことの再確認をしています。今日は、背中を丸めて文字を書いているパウロの姿を思い浮かべつつ、語られている事柄に耳を傾けてまいりましょう。この手紙は第一義的には第一世紀のガラテヤ地方の諸教会に向けて書かれたものでありながら、時代と地域を超えて全世界の教会に向けてのメッセージともなっている。福音は一つ、真理も一つです。

## 【本論】

### 本論 1. ユダヤ主義者の誇り

肉において見栄を張りたい人たちがあなたがたに割礼を強いています。彼らはただ、キリストの十字架のために迫害を受けたくないだけなのです。実際、割礼のある者自身、律法を守っていないのに、あなたがたに割礼を望んでいるのは、あなたがたの肉を誇りたいからです。

(6:12-13)

ユダヤ主義者については改めてご説明するまでもないでしょう。それでも、パウロはガラテヤ教会を掻き乱していた人々がやっていることの本質をまとめ上げます。この二つの節の中で、パウロは彼らの行動の三つの問題点を指摘しています。

- ① 肉において見栄を張っている
- ② 十字架のための迫害を避けている
- ③ 割礼を受けた人の肉を誇っている

第一と第三はほぼ同じことを言っています。「肉において見栄を張る」「割礼を受けた人の肉を誇る」とは、ユダヤ人である彼らが異邦人に対して割礼を施すと、それは「ユダヤ教徒」を一人獲得したことになるので、彼らの「伝道の成果」として誇れるものとなる。更に、割礼を受けた人々はユダヤ主義者の指導下に置かれ、人間的な教勢の拡大につながったのです。組織の中で力を持つようになる。パウロは彼らのそのような不純な動機を見抜いて、「見栄を張っている」と言うのです。

第二の指摘では、彼らが迫害を避けるために異邦人への割礼を推進していたということが言われています。これはどういう意味か。おそらく、ユダヤ人が異邦人と関わりを持ってよい条件として、彼らをユダヤ教徒に改宗させるという目的が明確でなくてはならなかったのでしょうか。それ以外の動機で異邦人と交わると、迫害を受けたようです。そこで彼らは、キリストの福音を語りながら、同時に割礼を施すという折衷案を考え出しました。恵みを語ると同時に律法も要求する。これらの生き方は本来相容れないにも拘らず、彼らはどうにか両立させようとしたのです。しかしパウロに言わせると、それはもはや福音ではなく、恵みに依り頼む生き方を捨てて自力の道を選び取ることにほかなりませんでした。

このように、パウロはユダヤ主義者がやっていることの矛盾を的確に見抜いていました。ガラテヤ教会の異邦人たちは律法に疎かったので、旧約聖書の知識を持ち合わせている人々の言うことを簡単に信じてしまったのです。

## 本論 2. パウロの誇り

しかし、この私には、私たちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。この方を通して、世界は私に対し、また私も世界に対して十字架につけられたのです。割礼の有無は問題ではなく、大事なものは、新しく造られることです。(6:14-15) ユダヤ主義者およびガラテヤ教会の多くの人々が割礼を誇りとしていたのに対し、パウロは自分にとっての誇りとは「主イエス・キリストの十字架」だけであると言います。これはもちろん、彼だけの誇りだという意味ではなく、キリスト者は本来主の十字架だけを誇りとするべき存在だと言っているのです。実際のところ、彼にはユダヤ人として誇れるものが多くありましたが、キリスト者となったときそれらを放棄しました。そのことを述べている有名な聖句があります。

私は生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派、熱心さの点では教会の迫害者、律法の義に関しては非の打ちどころのない者でした。しかし、私にとって利益であったこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。そればかりか、私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに私はすべてを失いましたが、それらを今は屑と考えています。(フィリピ 3:5-8)

ここで挙げられている事柄を一つひとつ取り上げることはいたしません。パウロがユダヤ人として持っていた誇りは、私たち日本人には到底理解できないほど大きなものだったことは理解しておく必要があるでしょう。ユダヤ人が持つ選民意識は、遺伝子レベルにおいて多民族と自分たちとを決定的に分離します。これは現代に至る優生思想<sup>1</sup>ともつながっています。この思想は人種差別と表裏一体の関係にあり、究極は人を人として見ないところにまで行き着いてしまう。「劣等」と判断された人間は家畜の如く見なされる。パウロが当初激しくキリスト者を弾圧した背景には、これと通じる思想があったのではないかと私は考えています。

しかしながら、パウロはキリストの福音と出会い、ユダヤ人としての誇りをかなぐり捨てました。神の御前で罪なき人は一人もなく、誰もが救いを必要としているという真理に辿り着いたとき、その誇りはもはや彼にとって必要ではなくなったのです。彼もまた救われるべき者の一人であり、赦され得ざる罪を犯していたところから贖われた存在であった。彼の中で異民族に対する一切の差別は消滅しました。

---

<sup>1</sup> 「優生学」人類の遺伝的素質を向上または減退させる社会的要因を研究して、悪性の遺伝的素質を淘汰し改善をはかることを目的とした応用遺伝学の一分野。1883年イギリスの遺伝学者F=ゴールトンが提唱。ユージェニックス。(国語辞典)

「世界は私に対し、また私も世界に対して十字架につけられた」という表現が出てきます。ここで言う「世界 (κόσμος/コスモス)」とは「古い秩序」のことであり、神と神の目的に敵対する物事を指します。そこには当然人種差別も含まれてくる。しかし、パウロの中ですべての人が「神に愛されるべき対象」となったのであり、「ユダヤ教徒」としてのパウロは死にました。「大事なのは、新しく造られること」。古き自己が死に、新しき自己に生まれ変わることが重要である。

私も過去に取得した賞状やトロフィーといったものを机に並べていた時期がありますが、主イエスと共に歩む中でそれらは不要になりました。もうどこへ行ってしまったか分かりません。心の中に思い出として残ってはいますが、そこに付随していた「誇り」は消えました。今は、すべてを失ったとしても自分に残るものとは何かということをはたすら考えて生きております。

### 本論 3. 神のイスラエルの誇り

この基準に従って進む人々の上に、また、神のイスラエルの上に、平和と憐れみがありますように。(6:16)

「基準 (κανών/カノーン)」と訳されたことばは「測り竿」を意味し、新しい創造こそが私たちの人生のすべての基準となったことを言い表しています。私たちは「この世のもの」を誇る生き方を捨てた存在なのです。家柄、経済力、社会的地位、学歴、資格、知識、能力、容姿…云々。パウロはこれらすべてを「ちりあくた」と呼びました。私たちにあって大切なことは、「キリストのもの」であるということ、自分が新しく造り変えられた存在であるということ、天に国籍を持つ者となったことです。

16 節で「神のイスラエル」という表現が出てくる点に注目しましょう。ユダヤ主義者が自分たちを「血筋によるイスラエル」と誇っていたのに対し、パウロは血筋とは関係のないところで信仰によって組み込まれる「キリストの系図」に属する者のことを「神のイスラエル」と呼びました。この表現は、3 章では「アブラハムの子孫」とも呼ばれていた。異邦人であってもこの系図の中に入ることができるのです。この恵みを彼は本書を通して伝え続けていました。

終わりに、誰も私を煩わさないでほしい。私は、この身に、イエスの焼き印を帯びています。きょうだいたち、私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にありますように、アーメン。(6:17-18)

いよいよ結びのことばとなります。「誰も私を煩わさないでほしい」という「疲れ」とも思える言い方には、「もう福音を一から教えるようなことはさせないでくれ」という彼の切実な

思いが込められているでしょう。他の書簡を読むと、最後の挨拶の部分では、自分が使徒としての職務を十分遂行できるように祈ってくれという依頼が含まれていることが多い。そして、手紙の受取人がパウロの使徒としての奉仕に積極的に参与してくれることを求めることばが大抵添えられています。しかし、本書においては、彼はそれすらも省き、ただただ福音に立ち返ってくれることだけを求めているのです。まずは原点に立ってほしいと。

「イエスの焼き印」とは、彼の背中に刻まれた無数の傷跡のことでしょう。彼はキリストを宣べ伝えたがゆえに鞭打ちに遭い、石打ちに晒されました。一生消えることのない傷を身に帯びていた。これが彼の健康面にも影響を及ぼしていたのではないかと想像します。しかし、これらの傷は彼にとって「キリストのもの」であることの「焼き印」にはほかなりませんでした。当時、お金で買われた奴隷には、主人の名前の頭文字が焼きごてで当てられたといわれています。それによって、彼が誰の所有であるかが一目で分かりました。パウロはこのことを例に挙げ、自分にはキリストの名が刻まれていると言っているのです。

#### 【結論】

私たちに刻まれている名は何でしょうか。私たちが最も大事にしているもの、私たちが誓いを立てている相手、私たちが誇りとしているもの。それをもう一度自らの心に問うてみたい。私たちの血液ですらキリストの香りがするほどに、主イエスと一つとなって生きていきたいと思えます。私たちの内に聖霊が住んでおられるならば、それが「イエスの焼き印」なのです。これにてガラテヤ書の学びを終えます。

#### 【祈り】

私たちの国籍を天に置いてくださっている父なる神様。天においても地においても、私たちに刻まれたキリストの焼き印をご覧ください。私たちは主のもの、主は私たちのものです。パウロのように確信をもって告白できるものであらせてください。主の証人として地上の生涯を歩み抜くことができますように。

#### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
この世の誇りから解放し、天に属するものにこそ価値を見出させ給う、父なる神の愛、

信者一人ひとりにご自身の名を刻み、何者にも奪われることのないものとなし給う、主イエス・キリストの恵み、  
内住の御霊として宿り、生活の隅々までキリストの香りで満たし給う、聖霊の親しき交わりが、  
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。